



Title	ゲオルク・ビューヒナーの『ヴォイツェク』
Author(s)	山元, 孝郎
Citation	言語文化研究. 2010, 36, p. 223-240
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10333
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ゲオルク・ビューヒナーの『ヴォイツェク』

山 元 孝 郎

In der vorliegenden Arbeit hat der Verfasser Georg Büchners „Woyzeck“ behandelt. Büchner hat in seinem Prosawerk „Lenz“ der Hauptfigur Lenz seine eigene Anschauung über die Kunst in den Mund gelegt. Da steht wie folgt geschrieben : “Er (Lenz) sagte : Die Dichter, von denen man sage, sie geben die Wirklichkeit, hätten auch keine Ahnung davon, doch seien sie immer noch erträglicher, als die, welche die Wirklichkeit verklären wollten. Der liebe Gott hat wohl die Welt so gemacht , wie sie sein soll, und wir können wohl was Besseres klecksen, unser einziges Bestreben soll sein, ihm ein wenig nachzuschaffen. Ich verlange in allem Leben, Möglichkeit des Daseins, und dann ist’s gut ; (.....)” Aber in „Woyzeck“ scheint dem Verfasser „Leben, Möglichkeit des Daseins“ nicht ausgedrückt zu sein. Wie das „Märchen“, das eine Alte im Werk erzählt, symbolisch andeutet, müsste man sagen, dass in „Woyzeck“ eher 〈Unmöglichkeit des Daseins〉 dramatisch ausgedrückt ist.

キーワード：ヴァルネラブルな人間としてのヴォイツェク 集団的メンタリティーから追放された人間の幻視・幻想 この世界における生存の不可能性

序.

ゲオルク・ビューヒナーの戯曲作品『ヴォイツェク』は、ビューヒナーの「ヘッセンの急使」活動の挫折後の亡命時代に書かれ、未完断片のままに終わったものである。社会の最底辺に位置する一兵士を主人公としたことが戯曲史のなかでも特筆され、ビューヒナーの死後、現代にいたるまできわめて高い評価を受けてきたものである。もうひとつ強調されるべきはその言語表現の斬新さである。外界の現実とヴォイツェクの精神の混乱から生じる幻視と幻聴が交錯するというおよそ当時の戯曲の常識からは考えられない言語表現であった。(シェークスピアの『リア王』に『ヴォイツェク』の言語表現の先駆形態を見ることができるかもしれない。)

I. 作品のモデルであるヨーハン・クリスティアーン・ヴォイツェク

ビューヒナーの他の作品『ダントンの死』、『レンツ』と同様に『ヴォイツェク』も実在の人物をモデルとしている。ビューヒナー研究者にとっては周知の事柄であるが、作品を

論じるに先立って、この実在の人物ヴォイツェクを紹介しておきたい。ヨーハン・クリスティアーン・ヴォイツェクはライプツィヒに生まれ、8歳の時に母を、13歳の時に父を亡くした。彼は鬻職人の下で徒弟奉公をして暮らし、1798年から各地を遍歴してさまざまな職業を経験した後兵士に志願した。1807年にウィーンベルクという名の女性と知り合い彼女との間に子供が一人できたが、結婚の手続きはしていない。1818年にライプツィヒに戻り、幼なじみであったヨハンナ・ヴォーストと付き合うようになった。ヴォイツェクは彼女が他の兵士とも関係を持っていることで嫉妬し、しばしば彼女に暴力をふるっていた。1821年6月21日、ヴォイツェクはヴォーストと逢引の約束をしていたが、彼女はそこに現れず他の兵士に会いに行った。その晩ヴォイツェクは短刀で彼女を刺殺し、その晩のうちに逮捕された。事件は情痴のもつれから、愛人を刺し殺すという比較的単純な性格のものと思われたが、牢獄を訪れる牧師に心を開きはじめたヴォイツェクが、長期間にわたって彼を苦しめた幻視・幻聴について話をするようになり、医師であり、宮廷顧問官であったクリスティアーン・アウグスト・クラールスによって数度にわたる精神鑑定が行われた。クラールスは、ヴォイツェクの異常な症状を認めながらも、彼が犯した殺人事件にたいする責任能力を有していることを主張し、1882年2月22日ヴォイツェクに死刑判決が下された。

しかし、その後、ヴォイツェクが牧師に語った内容はさらに奇怪な、異常現象としか解釈できないものであった。聞き覚えのない複数の声が言い争うのが聞こえたり、ベットのの上に奇怪な姿が見えたりしたというのであった。また、ヴォイツェクが下宿していた部屋の下階の家主も、ヴォイツェクが異常な声に怯え、階下を下りてきて、家主の部屋に夜明けまで留まらせてくれるように頼んだりしたことを司法当局に報告した。この結果、1822年11月10日に予定されていた処刑執行は延期され、クラールスによる再度の精神鑑定が行われることになった。その鑑定は非常に詳細なものであり、彼の生活上の経歴、軍隊生活での日常、女性関係までも記述されている。しかしながら、クラールスは、ヴォイツェクの生活上の秩序の欠如、教育を受けなかったがゆえの無知、鬱血体質から由来する幻聴、独語癖ゆえにみずからが無意識のうちに発する言葉を外界から聞こえてくるものと思い込んでしまう性質などをあげ、この二度目の鑑定報告においてもヴォイツェクの責任能力を認めている。¹⁾

死刑執行は1824年8月27日に行われた。町の広場に処刑台と見物席が組み立てられ、数千人の市民がこの公開処刑を見物したという。

『ヴォイツェク』にはもうひとつモデルとなったとされている殺人事件がある。煙草製造職人であったダニエル・シュモリングは1817年9月25日にベルリン近郊で彼の恋人を殺害し、詳細な精神疾患的検査ののちに刑務所に入れられたのである。²⁾ ヤン・クリストフ・ハウシルトは、ヴォイツェクとシュモリングの両者がともに社会の底辺に位置していた人

1) Georg Büchner „Woyzeck“. Marburger Ausgabe. Band 7,2. Text, Editionsbericht, Quellen, Erläuterungsteile. Herausgegeben von Burghard Dedner unter Mitarbeit von Arnd Beise, Ingrid Rehme, Eva - Maria Vering und Manfred Wenzel. S.251-329

2) Jan - Christoph Hauschild : Gerog Büchner. 1993 Stuttgart, Weimar. S.554.

間であることから次のような見解を示している。

ビューヒナーが示すのは、ヴォイツェクの犯罪には、社会的な犯罪が先行しているということである。ビューヒナーはヴォイツェクの犯罪責任を軽減しつつ、ヴォイツェクの周囲にいて彼を苦しめる者たちにその罪を帰している。それは国家を担う機構である軍隊や経済である。その代表者たちがヴォイツェクを傷つけ搾取するのである。³⁾

ビューヒナーのテキストを見ていく限り、ハウシルトの主張は正当である。しかし、『ヴォイツェク』を社会批判のドラマとして見ていくとき、すくいとることが困難である、人間の悪意のありよう、野蛮さ、残酷さといったものがこの作品の根底にあるように筆者には思われる。そのような悪意の総体がヴォイツェクを追い詰めて行く過程で、彼は幻聴、幻視、フリーメーソンへの恐怖といったものを経験するのだが、それは社会が総体として持つ抽象的な悪意ではない。ヴォイツェクという一人の人間に向けられた具体的・個別的な悪意なのである。作品冒頭における大尉とヴォイツェクのやりとりは、抽象的な権力関係による〈いじめ〉ではない。この〈いじめ〉は、ヴォイツェクの個人的状況に具体的に言及しつつ、彼の精神に深刻な傷痕を与えるのである。

Ⅱ.『ヴォイツェク』研究の現状

マールブルク版ビューヒナー全集は、19世紀前半に起こった刑法への精神医学の導入の流れを以下のように述べている。

このような変遷の学問的背景は、人間を物質的肉体と非物質的理性＝魂の合成物と看做し、人間の理性をそれによって人間が他の動物から区別されるべきである自由な意思決定の能力であると定義してきた観念論の哲学の本質的地位が疑問にさらされるようになったことである。⁴⁾

人間の意志の力を自由なものであるとする伝統的な観念論哲学にもとづく刑法は揺らぎ、犯罪者には精神鑑定による責任能力の検証と、その結果にもとづく情状酌量の余地が生まれたのである。

その鑑定報告においてクラールスは、ヴォイツェクの責任能力に疑いを差し挟む少なからぬ間接証拠を提出しているが、結論としては、ヴォイツェクにおいては「意志の自由は決して失われていなかった」と述べている。⁵⁾

そしてビューヒナーの作品はこのクラールス鑑定の持つ伝統的観念論から由来する「自

3) a.a.O., S.556.

4) Marburger Ausgabe. Band 7,2. S.333.

5) a.a.O., S.335.

由意志論」を批判し、ヴォイツェクに責任能力を負わせることの不合理性を述べようとした、というのがマールブルク版の基本的立場であると言ってよい。ビューヒナーは1834年4月2日付けの家族宛ての手紙で次のように述べている。

ぼくは誰をも軽蔑などしていません。少なくとも物事の理解が悪いからとか、教養がないという理由では。というのも馬鹿になるまいとか、罪を犯すまいとか思っても自分の思い通りになるわけではありませんし — それに誰しも同じ環境に生まれたらみんな同じような人間になるでしょうし、境遇は人間の手のおよばないものですからね。⁶⁾

ビューヒナーが、『ヴォイツェク』でクラールス鑑定書に色濃い、当時の法医学になお強く残存していた「自由意志論」を批判し、ヴォイツェクに責任能力ありとした裁判制度にたいしても批判的姿勢を示していることは確かであろう。しかしながら『ヴォイツェク』という作品が、そのような社会批判の領域にのみ留まっているとは筆者には思われないう。この作品はこの世界における「生の不可能性、無意味さ」そのものをテーマ化していると思われるのだ。

しかし、作品そのものを論じる前に、『ヴォイツェク』よりも前に書かれた散文作品『レンツ』と『ヴォイツェク』のテーマの関連性を考えておきたい。

『レンツ』は1751年にヨーロッパの辺境であるシュトーフラントに生まれ、1792年にモスクワの路上に斃死した劇作家、詩人ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツをモデルとした作品である。ゲーテのストラスブール滞在時には、シュトルム・ウント・ドラング運動の盟友として『家庭教師』、『軍人たち』という文学史的にも重要な作品を書いているが、ゲーテの後を追うようにしてヴァイマルに赴き、ヴァイマル滞在中にゲーテとの間に何らかの確執を起し、ヴァイマルから追放され、その後アルザス地方、スイスの知己を頼って放浪した。この間に精神の錯乱をきたし、1779年には弟に付き添われて、リュベック経由でリガの両親の家に戻っている。(レンツのことを常に気遣っていた母親はこの前年に亡くなっている。) レンツの精神の病は、古くから精神分裂病と考えられてきた。しかし、レンツの時代、なお精神医学の発達は萌芽状態であり、精神の病は怠惰かつ乱脈な生活の果てに行き着く末路と一般に考えられていた。⁷⁾ ビューヒナーが作品『レンツ』を執筆する際に最大の資料となった牧師オーバリーンの手記においても、「父に対する不服従、一所不在の生活、彼の目的に合わない職業生活、彼の女性たちとの頻繁な付き合いによってもたらされた結果」⁸⁾ がレンツの精神の錯乱の原因であると述べられている。医学を学んだ自然科学者であったビューヒナーは、精神の病についてのこのような偏見を批判し、精神の病の病状を病理学者の立場から正確に叙述したのだ、というのが現在の『レ

6) Georg Büchner : Werke und Briefe. Band 2. S.377.

7) Siehe : Curt Hohof : J.M.R.Lenz. Hamburg 1984.

8) Georg Büchner : Lenz. Studienausgabe. 2000 Stuttgart. S.47

ンツ』研究の大勢となっていると言ってよいだろう。

カロリン・ゼーリング・ディーツは、作品『レンツ』と『ヴォイツェク』の両者が、ビューヒナーの時代に支配的だった身体的・生理的現象と精神的・感情的現象の相関性を重視する精神医学にたいするビューヒナーの批判から書かれたものであることを主張している。

『レンツ』と『ヴォイツェク』はPararellprojekte(並行的プロジェクト)として読まれうるものである。すなわち、異なったやりかたにおいてではあるが、この二つの作品は、ビューヒナーの時代においてきわめてアクチュアルであった精神医学的論争の枠にはめこまれているのである。⁹⁾

同様にマールブルク版ビューヒナー全集には以下のような記述が見られる。

『レンツ』と『ヴォイツェク』は二重の見地においてPararellprojekteとして読まれうるものである。この二つの作品は継続中であった精神医学的論争に参加している。この二つのケースにおいてビューヒナーは彼自身の作家的営みを同時代の心理学が文学に課していた要求に合致させているのである。例えば、古い学派の代表格であるヴィルヘルム・イーデラーにとって文芸は心理学の源泉であり、そして、本物の詩人は、その生産的なファンタジーによって経験を経ずともこれを先取りすることができる天才と呼ばれるにふさわしかったのにたいし (.....)、新しい学派の代表格フリードリッヒ・ビルトは、文学は「病理学、解剖学、診断学、食事療法学、物理療法、生理学等々と調和することが必要である。それが大きな間違いを避けるためには必要である」と要求する。『レンツ』と『ヴォイツェク』においてビューヒナーはこの新しい学派の分析と発見に与したのである。¹⁰⁾

しかし、『ヴォイツェク』という作品の射程はそこに留まらない。その言語表現の新しさ、その作品内容の特異さは、人間の心が持つ暗黒さ、悪意、卑劣さと、そのような悪意によって、唯一自分の愛の対象である女を刺し殺すところまで追い込まれていく一人の人間の底の見えない暗闇のような絶望感を描き出している。以下、作品を見ていきたい。

Ⅲ. ヴォイツェクにたいする〈いじめ〉

まず、ヴォイツェクを〈いじめ〉の対象とし、ヴォイツェクのヴァルネラブルな、すなわち脆弱で、防御の弱い部分を衝くことで、自己満足に浸り、優越感情を味わうのは、軍隊組織においてもヴォイツェクの上官にあたる大尉である。ヴォイツェクのヴァルネラブ

9) Carolin Seling - Diez : Büchners *Lenz* als Rekonstruktion eines Falls » religiöser Melancholie 《 In : Georg Büchner Jahrbuch 9. S.236.

10) Georg Büchner » *Lenz* 《. Marburger Ausgabe. Band 5. Herausgegeben von Burghard Dedner und Fubert Gersch unter Mitarbeit von Eva - Maria Vering und Werner Weiland. S.137

ルな部分は、まず、教会の手続きを経ないで事実上の結婚をし、子供をもうけている点である。大尉の〈いじめ〉は、まずこの点を標的とする。

大尉：(.....) 貴様には子供がいるが、教会の祝福を受けておらんと連隊付きの牧師様が言っておられたぞ。教会の祝福を受けておらんな。これは俺が言っているのではないぞ。¹¹⁾

大尉は教会の権威をたてに取っているが、実のところ、彼の発言の奥にある動機は性的欲求であるだろう。大尉は、ヴォイツェクという何のとりえもない貧しい下級兵士がマリーという美貌の持ち主を内縁の妻としていることが腹立たしく、妬ましくもあるのだ。大尉にとって下級兵士にたいする〈いじめ〉や〈からかい〉はごく日常的な振る舞いにすぎない。しかし、そのような〈いじめ〉に抵抗できないヴォイツェクにとってそれは凶器として働き、彼を精神の錯乱へと追いやるのである。

大尉のヴォイツェクにたいする批判的言辭が、結婚という制度を重視するモラル的姿勢に基づくものではなく、そこには大尉自身の性的欲求、下級兵士でありながら魅力的な女マリーを内縁の妻としているヴォイツェクにたいする妬みの気持ちがあることが次の台詞から読み取れる。

大尉：おまえには徳が足らんぞ。いや、まったく徳を持たぬやつだ。血もあり、肉もあるだと。そりゃ俺だって雨の日に窓際に横になってだな、白いストッキングが路地を走って行くのを見ればな、むらむらっと来るさ。¹²⁾

この一節は（これまで筆者の知る限り指摘されたことはないと思うが）、ヤーコプ・レンツの戯曲作品『軍人たち』における以下の箇所を下敷きにしている。将校マリが、強い性的魅力を発散する娘マリアーネにたいする欲情を述べる台詞を見てみよう。

マリ：(.....) 暑い暑い8月の日のことだった。彼女は暑さのために薄い薄いラミー織りのスカートをはいていたんだ。そのスカートから彼女の綺麗な脚が透けて見えるほどだった。彼女が部屋の中を歩くたびに、スカートがこうひらひらしたんだ ― 聞いてくれ。あの夜彼女と寝ることが出来たら、おれは地獄にでも墜ちたさ。¹³⁾

ヴォイツェクにたいする大尉の〈いじめ〉は明らかに性的な羨望を含んである。一兵士でしかないヴォイツェクには、マリーという美しい内縁の妻がある。大尉にはそれが妬

11) Georg Büchner : Werke und Briefe. Band 1. S.152.

12) a.a.O., S.152.

13) Jakob Michael Reinhold Lenz : Werke und Briefe 1. S.243.

ましいのである。しかし、大尉はこの妬みに〈徳〉という覆いをかけ、ヴォイツェクの結婚が教会の手続きを経たものでないことをたてにとって〈いじめ〉の標的にするのである。

そして、教会の手続きを経ない男女関係を持ち、子供を作っているという点では、マリーもヴォイツェク同様に世間の侮蔑の標的となりやすい立場にいる。「町」の景において、マリーと隣家のおかみさんが家の前を通る鼓手長の男ぶりの良さをめぐってかわす会話を見てみよう。

マルグレート：なんて立派な男。まるで木の幹だわ。

マリー：ああして立っているところはまるでライオンだわ。

マルグレート：まあなんて親しげな目付きなの。あんたにしちゃめずらしいわね。

マリー：(駭う)兵隊さんはいい男。

マルグレート：あんたの目ときたらぎらぎら光ってるわよ。

マリー：だったらどうしたってのよ。あんたの目もユダヤ人のところへ行って磨いてもらいよ。そしたらボタン二つと取り替えてもらえるくらいには光るかもしれないよ。

マルグレート：何ですって。え、あんた。未婚の奥さん、あたしはまっとうな人間なんですからね。ところがあんたは七枚重ねの皮のズボンを透かして見るっていうじゃないの。

マリー：あばずれ女。(窓を閉める)おいで、坊や。世間のやつらの言うことといたら。そりゃおまえは可哀そうな私生児だけど、おまえの顔を見てるとお母ちゃんはうれしいのさ。(……)¹⁴⁾

大尉とヴォイツェクが会話を交わす第一景の次に置かれた第二景「広野」において、ヴォイツェクはすでにフリーメーソンの陰謀への恐怖感を同僚のアンドレースに伝えている。そして「アンドレース！ なんとという明るさだ。火の玉が空を走って行き、上からラッパのようなすごい響きが降ってくる」¹⁵⁾ というように黙示録幻視がすでに彼の精神を支配していることが示される。

医者による科学的客観性を装った〈いじめ〉にたいしてもヴォイツェクはなんら抵抗の手段を持たない。ゆえに彼は想念のなかで世界秩序が逆転する黙示録的幻想を呼び出すしかないのである。

ヴォイツェク：先生は二重になった自然というものを見たことがありますか。太陽が天の南で停止し、世界が炎に包まれたようになると、突然恐ろしい声がわたしに話しかてくるんです。¹⁶⁾

14) Georg Büchner : Werke und Briefe. Band 1. S.154.

15) a.a.O., S.153.

16) a.a.O., S.159.

医者はヴォイツェクにえんどう豆だけを食べさせるという一種の人体実験を行っている。医者はそのことによってヴォイツェクが動物の領域へと退化することを期待している。そして、医者と同様教養階級に属する医学生たちを前にして、そのようなヴォイツェクを見世物とすることにより、教養ある知識人としての自らのアイデンティティを強化し、無知で教育のない人間にたいする優越感情を共有するのである。

医者：(.....) ところでヴォイツェク、学生諸君に耳を動かしてやってくれんか。諸君に一度お目にかけたいと思っていたのだ。この男は二本の筋肉が動くのだ。さあ、始めてくれ。

ヴォイツェク：先生、それは！

医者：こん畜生、わしにおまえの耳を動かしてくれというのか。諸君、こいつは今驢馬になるプロセスをたどりつつあるのだ。¹⁷⁾

こうしてヴォイツェクは、知性を持った人間の領域からも象徴的に追放される。彼はこの人間世界に身を置く場所を失うことになるのだ。

人間には他人の苦しみを見ることによって喜びを感じるという全般的な傾向が確かに存在する。ビューヒナーは『レンツ』において主人公レンツに「それぞれの人間の持つ独自性に迫っていくためには、人間の本性を愛さなければならない。誰のことも卑しすぎるとか醜くすぎるとか考えてはならない、そうであってこそ始めて人間の本性を理解できるのだ」¹⁸⁾と言わせているが、この現実の世界に存在する人間たちは、〈いじめ〉の対象となしうる人間は〈いじめ〉の対象とし、何らかの利用価値(大尉にとってヴォイツェクは学問的業績をつくるための実験材料としての利用価値を持っている)を持つものは利用するというのが、その本来の姿であり、ビューヒナーはそれを認識していたからこそ、大尉や医者といった作中人物を造形できたのである。このような認識、人間は他人の苦しみに喜びを覚える本能ともいべきものを持っているという認識をビューヒナーは、ヤーコプ・レンツの戯曲作品から受け継いでいる。

ヤーコプ・レンツの戯曲作品『軍人たち』において、貴族出身の将校たちは、この町の実直な商人シュトルティウスを、その許婚マリアーネが、将校デスポルトになびいていることをネタにして、嘲弄しようとする。将校ハウディはカフェにたむろする将校たちにシュトルティウスの来着を予告したのち、「みんな、手はずはおれにまかせてくれなきゃならん。そうでないときみたちは見世物を台無しにしてしまう。あいつはおれを信用しているんだからな」と述べる。ところが将校ランムラーは、「おまえは間違っている。おれはあいつのことをおまえよりよく知っているのだ。目標へ突撃だ」と述べて、デスポルトとマリアーネとの関係を直接的にほめかすことで、手っ取り早くシュトルティウスの苦悩

17) a.a.O., S.168.

18) a.a.O., S.94

と苦悶を享受することを主張する。

ランムラー：（テーブルにつく）最近、リレからの便りがありますか。あなたの許嫁はお元気ですか。（ハウディはランムラーに怖い目つきで目配せする。ランムラーはにやにやしながら座っている）

シュトルティウス：（当惑して）これはどうも御丁寧に。— どうか御容赦を願います。許嫁といわれましても、許嫁は持っておりません。

ランムラー：リレのヴェーゼナー家のお嬢さんは、あなたの許嫁ではないのですか。デスポルトが手紙で書いて寄越しましたがね、あなたたちが婚約したって。

シュトルティウス：デスポルトさんならわたしより事情をよく御存知のはずです。¹⁹⁾

ルネ・ジラルールによる解説がこの場面の意味、将校たちの心理を明らかにするであろう。「ハウディは彼の仲間たちにシュトルティウスの警戒心を呼び起こさないようにと忠告する。それは、自らが愚弄されているということにシュトルティウスが気付かないという状態で、このシュトルティウスを嘲弄するためであり、また、この洗練されたいじめの楽しみを引き伸ばすことが出来るためである」²⁰⁾ というのがこの場面に示される〈いじめ〉のメカニズムである。

一人の人間に対する〈いじめ〉、嘲弄は、この嘲弄行為に加担する人間集団の連帯によってより効果的なものになる。また、ある種の人間は、〈いじめ〉を受ける人間にたいして、何らかの方法で恩を着せ、それによって相手の反撃が自分に向けられることを予防しつつ、かつ〈いじめ〉の効果を高めることを好む。『軍人たち』においてはハウディがこの〈いじめ〉の原理を体現する。ハウディはまずシュトルティウスの心を収攬し、恩を売りつつ、シュトルティウスの心を絡みとっていく。その目的は、仲間の将校たちがたむろするカフェにシュトルツィウスを連れて行き、シュトルティウスに同情し、肩入れしている自分＝ハウディを演じることであり、同時に、そのように自分＝ハウディの配慮を与えられていると信じ、自らが嘲笑の対象になっていることに気付かないシュトルティウスを将校仲間たちに見世物として供することにある。将校仲間の一人であるデスポルトがその婚約者マリアーネを誘惑しつつあることをシュトルツィウスに暗示することは、それだけでもシュトルティウスにたいして残酷な〈いじめ〉の効果を持つであろうが、じつは集団的な嘲弄を受けていながら、これに気付かず、ハウディをはじめ、自分たちから配慮を受けていると感じ、これに、感謝すべき義務を負わされたという状態で〈いじめ〉の被害者を眼前に見ることに、将校たち（あるいは、ある種のメンタリティーの人間たち）はより大きな快感を感じるのである。ところが、そのような隠微な〈いじめ〉の心理を理解出来ず、他者の苦

19) Jakob Michael Reinhold Lenz : Werke und Briefe 1. S.209.

20) René Girard : Jakob Michael Reinhold Lenz 1751–1792 Genèse d'une dramaturgie du tragicomique. Paris 1968.

悩の直接的な享受を好むランムラーが「見世物を台無しにしてしまう」のである。

『軍人たち』におけるハウディを始めとする将校たちは、彼らの目には真面目だけが取りえの商人に過ぎないと思われるシュトルティウスがマリアーネという町でも評判の美人を事実上の許嫁としていることに、愉快ならざる気持ちを持っている。そこには、軍人である自分たちから見て、軽蔑されるべき懦弱な世界観のうえに生活している商人が結婚によって性的充足を手に入れることへの妬みがあるに違いない。しかし、結婚という市民社会の倫理規範の根幹をなす制度については彼らはこれを批判することが出来ない。彼らが待望するのは、マリアーネがシュトルティウスを捨てて他の男に走ることである。デスポルトがマリアーネを誘惑することでことが将校たちの期待通りの成り行きになったのち、彼らの関心はシュトルティウスをもっとも効果的に嘲弄することである。彼らの戦略は、シュトルティウスのことを配慮してあげているのだという善意の表情を偽装しつつ、その仮面の下であざ笑いながら、シュトルティウスの困惑と苦痛を楽しむことである。

IV. マリーとグレートヘンの相似

マリーはまたヴォイツェクという下級兵士との関係を続けながら、自分の美貌が、貧困のゆえに輝きを失っていることを嘆く。ヴォイツェクはマリーとの生活のために、軍隊における勤務のほかに、床屋としての仕事、医者の人体実験の被験者などの仕事をして、ぎりぎりの家計を維持しているのであるが、自らの美貌を意識しているマリーは、自らの境遇が不満でならない。おそらく鼓手長から贈られたと思われるイヤリングに夢中になりつつ、世の中の裕福な女性たちへの羨望の思いを独白する。

マリー：(.....)このイヤリングの石はなんて光るんだろう。(.....)この世の片隅にしか住むところがなくて、鏡のかけらしか持っていないあたしみたいな女でも、唇はこんなに赤いんだわ。頭のてっぺんから足の先まで映せる姿見や、いつも手にキスをする美男の旦那をお持ちの貴婦人にだって負けやしないよ、それでもわたしはただの貧乏女さ。(.....)²¹⁾

この場面は、ファウスト第一部で、ファウストがひそかに贈った宝石入りの小箱を見つけたグレートヘンの描写から発想を得たものであろう。

グレートヘン：(.....)この耳飾だけでもわたしのものだったらねえ。
全然違って見えるわ。
若くて器量よしというだけじゃ仕様がないわ。
そりゃ結構なことには違いはないけれど、
それだけじゃやっぱりだめだわ。

21) Georg Büchner : Werke und Briefe. Band 1. S.157.

人が褒めてくれるんだって、半分は気の毒に思ってたことなんだから。²²⁾

ヴォイツェクを精神の錯乱へと追いやる決定的な要因はマリーの喪失である。疎外され、侮蔑され続けるこの世界での生活も、マリーと子供との生活というわずかな安らぎによって耐え忍ぶことができていた。ところが、マリーが鼓手長と浮気をしていることを知らされたとき、彼がすがり付いていた生存の基盤は崩壊するのである。彼はその幻視・幻聴のなかで世界秩序の逆転、世界のありようの崩壊を望む。しかし、彼には何の力もない。大尉、医者、鼓手長の誰一人にたいしても、反抗することはできない。彼にできることは愛するマリーを刺し殺して、鼓手長に奪われることを防ぐことだけだった。ヴォイツェクの精神の錯乱を、病理学的な立場から内在的に発したものと見ることは、この戯曲の本質を見落とすことになるであろう。ビューヒナーが描き出そうとしたものは、社会的経済格差や当時の精神医学の偏見の立場のみではなく、人間の悪意そのものではないだろうか。一人の人間を殺人へと追いやった社会のありようや、その人間の精神の病にもかかわらず責任能力ありとして死刑にした精神医学にたいする批判に留まらず、人間の悪意の際限の無さと、その悪意に包囲されて孤立している一人の人間に託して、人間の生存の本質を描き出そうとしたのがこの作品であると考えられる。

V. 老婆の語る〈メールヘン〉

老婆の語る〈メールヘン〉においては黙示録的暴力の世界が反転され、静寂と寂寞の世界となる。

老婆：(……)昔可哀そうな子供がいたとさ。父さんも母さんもいなかった。みんな死にまわって、もう地上には誰一人いなかった。みんな死んで、そしてその子は出かけて行き、昼も夜も人を訪ね歩いた。そして地上には誰もいなかったから、その子は天に行こうと思った。そして月はやさしくその子を見守っていた。そしてその子がやっと月にたどり着くと、それは腐った木切れだった。それでその子は太陽に行った。するとそれは腐った向日葵だった。そしてその子が星々のところへ行くと、それは百舌鳥が枝に差したように、ピンで留められた小さな金の蚊だった。そしてその子が地上に戻って来ようとする、それは逆さにされた土鍋だった。そしてその子はまったくのひとりぼっちだった。そしてその子は座り込んで泣いたとさ。そして今でもそこに座って、まったくのひとりぼっちなんじゃ。²³⁾

この〈メールヘン〉はグリム兄弟によるメールヘン集に収められている『七羽のカラス』、および、『星の金貨』からの影響が推定される。ここでは『七羽のカラス』との比較を行っ

22) J.W.Goethe : Faust. Der Tragödie erster Teil. Reclam. S.83.

23) Georg Büchner : Werke und Briefe. Band 1. S.171f.

てみたい。七人の兄たちがカラスになってしまったことが、自分の洗礼のための水を汲みに行った兄たちに父が呪いをかけたせいであることを知った少女は兄たちを探す旅にでる。

さてこの少女はずっとずっと世界の果てまで歩いていきました。そしてその子は太陽にたどりつきました。しかし、太陽はあまりにも熱く、残酷で、小さな子供たちをむさぼり食べるのでした。いそいでその子はそこを離れ、月までやって来ました。しかし、月はあまりにも冷たく、ぞっとするほど意地が悪いのでした。そして月はその子に気づくと「におうぞ、におうぞ。人間の肉のにおいがするぞ」と言うのでした。そこでその子はいそいで出発して、星たちのところへやって来ました。星たちは暖かく、親切で、善良でした。そしてそれぞれ小さな特製の椅子に座っていました。明けの明星が立ち上がって、その子に小さなひよこの骨をくれ、こう言ったのでした。「おまえがこの骨を持って行かないと、おまえはガラス山を開けることはできない。そしておまえの兄たちはこのガラス山にいるのだ。」少女はひよこの骨を受け取って、それを布に包んでまた歩き始めました。ずっとずっと歩いて行くとうやうやくのことでガラス山にたどりつきました。門には錠がおりていました。それでひよこの骨を取り出そうと布を開くと中は空っぽなのでした。少女は親切なお星様がくれたものを失くしてしまったのでした。どうしたらいいのでしょうか。これでは兄さんたちを助け出したくてもガラス山の錠がないのです。少女は小刀を取り出して健気にも自分のかわいらしい小指を一本切り落とすと、それを門の穴に差し込んで上手い具合に扉を開けました²⁴⁾

グリムのメールヘンにおいてはこの残酷な世界のなかにも救済の契機が蔵されている。少女が自分の小指を切り取って錠の代わりに利用するという自己犠牲によってこのメールヘンには救済が与えられる。しかし、『ヴォイツェク』における〈メールヘン〉にはなんの救済も慰めもない。人間は孤立し、共感さえそこにはないのだ。

ビューヒナーがこの戯曲に、このような老婆の〈メールヘン〉を差し入れた理由はなんだろうか。少なくとも、ヴォイツェク、マリー、大尉、医者といった主要な登場人物によって形成される劇世界には、このような老婆の〈メールヘン〉は必須なものではない。ビューヒナーは〈生の無意味さ〉を暗示しているのであるまいか。ビューヒナーは、『ダントンの死』と『レンツ』の両作品において登場人物にたくして自己の芸術観を語らせている。『ダントンの死』におけるカミーユの芸術論を見てみよう。

カミーユ：言っとくがね、世間のやつらはなんでもかんでも、劇場や音楽会場や展覧会場での催し物という体裁をとって、息の通わぬ模造品としてでないと、それにたいして目も耳ももたないんだ。(.....)

人々を劇場から裏町に出してやれ。この現実の惨めさはどうだ！ やつらはひどい模

24) Brüder Grimm : Kinder und Hausmärchen. Band 1. Reclam. S.155.

造品を見ているうちに、自分たちの造物主を忘れていたんだ。自らのなかでも、そのまわりでも、灼熱し、泡立ち、きらめき、瞬間ごとに新たに誕生している創造の力をやつらは見も聞きもしないのだ。やつらは芝居に出かけ、詩や小説を読み、そのなかにてでくるしかめっ面を真似てみせる。そして神の創った被造物を見ると「なんて平凡なのだ」とほざくんだ。²⁵⁾

現実の惨めさ、人々の貧しさには軽蔑の目を向けながら、それが舞台の上で上演される芸術作品にされると、自己の芸術理解を誇示し、不幸な境遇に置かれた人間に同情する自己像を作り上げる。ビューヒナーはそのような富裕階層の芸術との関わりを厳しく批判している。しかし、また批判があるところには希望があるとも言えるだろう。ビューヒナーはカミーユをして、彼の時代の芸術受容のありようを批判させることで、芸術が本来果たすべき別の機能を暗示しているのだ。

『レンツ』においてレンツが語る芸術論をも見ておこう。

このころ理想主義の時代が始まっていた。カウフマンはこの傾向の信望者だった。レンツは激しく反発してこう言った。現実を表現していると言われる作家たちは、現実のことなどまるでわかっていない。それでもこの連中のほうが現実を理想化する作家たちよりもまだましだ。神様は世界がそうあるべきように創造されたのであるから、われわれがそれにまざるものをこねあげたりできるはずがない。われわれの唯一の努力は、神にならってなにがしかの創造をおこなうことでなければならない。わたしは万物のなかに――生命と存在の可能性を求める。それがあればいいのだ。それさえあれば美醜など問題ではない。創造されたものに生命が宿っているかどうかは美醜より上位の問題であり、これだけが芸術作品の規範なのだ。²⁶⁾

冒頭の「理想主義の時代が始まっていた」というのは、作品のモデルとなったヤーコブ・レンツが牧師オーバリーンのもとに滞在していたのが1778年であることを考えると、文学史的には時代錯誤であるが、ビューヒナーはあえて、理想主義批判のために時代錯誤的設定を行ったのであろう。ここでもビューヒナーは、理想主義批判の形をかりつつ、自己の芸術観を展開している。芸術作品に必要なのは、「生命と存在の可能性」であり、「美醜は問題ではない」というビューヒナーの主張は、彼の世界観として十分に理解できるであろう。しかし、この世界観を『ヴォイツェク』という作品に当てはめることが果たしてできるだろうか。『ヴォイツェク』には、むしろ生命と存在の不可能性が表現されているのではないだろうか。筆者には、『ダントンの死』と『レンツ』の両者において述べられた芸術観と『ヴォイツェク』という作品の間には大きな断絶があるように思われる。あえて言

25) Georg Büchner : Werke und Briefe. Band 1. S.40.

26) a.a.O., S.94.

えば『ヴォイツェク』において表現されているのは、生存の苦痛と存在の不可能性と言うべきであろう。ヴォイツェクという自らは他者に対する悪意を抱かぬにもかかわらず、集団的な悪意と妬みにさらされ、ヴァルネラビリティーの対象として社会の集団的メンタリティーから追放される人間の生存の不可能性がここでは表現されているのではあるまいか。ゆえに老婆の語る〈メールヘン〉が作品の中に挿入される必然性があったのである。

VI. 『ヴォイツェク』における言語使用

次に『ヴォイツェク』における言語使用の問題を検討してみよう。ヴォイツェクの周りに配された登場人物たちは、ヴォイツェクとコミュニケーションを取ろうとはしていない。彼らは、ヴォイツェクを集団的メンタリティーの外側に追放することで自らのアイデンティティーを強化することを無意識のうちにやっている。ヴォイツェクと大尉の対話を見てみよう。

ヴォイツェク：大尉殿、神様はうちの餓鬼が生まれる前に両親が教会の祝福を受けていないからといって、あれを見放したりはされないのです。主は申されました。「お子らのわれのもとに來たるをとどむな」と。

大尉：なんだと。なんととんちんかんな答えだ。そんな答えをされたら俺の頭が混乱してしまうではいか。俺は神様の話などしておらん。おまえの話をしているんだ。

ヴォイツェク：われわれは貧乏人であります。よろしいですか、大尉殿、金、金なんであります。金もない貧乏人が、自分の餓鬼を道徳的にこの世にひりだせますか。誰にだって血もあり、肉もあるのであります。自分みたいな者は、この世にいても、あの世に行ってもすくわれません。たとえ天国に行っても雷を鳴らす下働きでこき使われるくらいが関の山です。²⁷⁾

大尉の言語は一貫してヴォイツェクのヴァルネラブルな部分を衝き、そのことを楽しもうとするものである。ヴォイツェクの貧しさや、生活の境遇などには大尉は一顧だに与えない。ヴォイツェクは、けっして魯鈍な人間ではない。新約聖書を的確に引用しつつ、自らの貧しさが、世の人々の言う「道徳」に従って生きることが不可能にしていることを訴えようとするが、大尉がそのようなヴォイツェクの訴えに耳をかすことはない。ヴォイツェクはその不安感、疎外感を外界に投影するしかない。ヴォイツェクはフリーメーソンの陰謀と、黙示録的な世界滅亡のイメージの錯綜する幻視・幻聴を同僚のアンドレースにむかって口走る。

ヴォイツェク：俺の後ろから追っかけてくる音、下からも何か聞こえる。(地面を足で踏みつける)がらんだ。この下はみんながらんだ。フリーメーソンの仕業だぞ！

27) a.a.O., S.152.

アンドレース：怖くなってきたよ。

ヴォイツェク：妙にしんとしているじゃないか。息がとまりそうだ。アンドレース！

アンドレース：なんだ！

ヴォイツェク：何か話してくれ！（あたりを凝視して）アンドレース！ なんとという明るさだ。火の玉が空を走って行き、上からラッパのようなすごい音が降ってくる。今度は上がって行く。逃げろ、後ろを振り向くな。（アンドレースを藪に引っ張っていく）

アンドレース：（しばらくしてから）ヴォイツェク、まだ聞こえるか？

ヴォイツェク：しんとしている。なにもかもしんとしている。まるで世界が死んでしまったようだ。

アンドレース：聞こえるか。帰營の太鼓が鳴っているぞ。帰らなきゃ。²⁸⁾

アンドレースは作中において、例外的にヴォイツェクを〈いじめ〉の標的にすることのない人物である。ゆえにヴォイツェクはその胸中にある混沌とした不安感をアンドレースに伝えようとする。その結果、読者もまたヴォイツェクの言語化することが困難であるところの精神内容に触れることができるのである。しかし、アンドレースは、ヴォイツェクの不安と疎外感の具体的な内容に関与することはなく、ただヴォイツェクの独語に近い不安に満ちた言語表現の聞き手になっているだけである。

内縁の妻マリーが鼓手長とのあいだで関係を持っているらしいことを大尉にほめかされ、この世で自分が所有する唯一のものであるマリーの喪失にうちのめされたヴォイツェクはアンドレースにその苦痛を伝えようとする。しかし、ヴォイツェクとアンドレースの間には通常のコミュニケーションは成立しない。いや、むしろ、ヴォイツェクにとっては、この世界そのものがコミュニケーションが成立しない場所なのであり、彼はその中で疎外され、孤立しているのだと言うべきであろう。

アンドレース：どこへ行くんだ、戦友？

ヴォイツェク：将校さんのワインを取ってくるんだ。一だがな、アンドレース、あいつは俺のたった一人の女だったんだ。

アンドレース：どいつがさ？

ヴォイツェク：なんでもない。じゃあな。²⁹⁾

マリーと鼓手長の関係を暗示されたヴォイツェクの脳裏には、人間の心というものが、解くことの出来ない謎のように映る。ヴォイツェクという他人にたいする悪意を抱くことなく、単純な善意を生存のうえでの基盤とすることしかできない人間にとって、マリーの裏切り行為は理解の埒外にあるものなのだ。引用してみよう。

28) a.a.O., S.153.

29) a.a.O., S.168.

ヴォイツェク：(彼女の顔をじっと見て、首を振る) うーん、何も見えない、何も見えないぞ。顔に証拠が見つかるはずなんだがな。手でつかめるほどはっきりと。

マリー：(怖気づいて) どうしたのよ、フランツ？ 頭が変になったのじゃない？

ヴォイツェク：罪悪ってこんなに厚い胸と広い肩をしているものなのか。嫌な臭いをたてているから天国の天使まであぶりだせるかもしれんぞ。お前、赤い唇をしているなあ、マリー。水ぶくれはできていないか。じゃあな、お前は罪そのものののように美しいなあ。— 死罪にあたるほどの罪がこんなにきれいでいいのかなあ。

マリー：フランツ、あんたは熱にうかされてうわ言を言ってるのよ。

ヴォイツェク：畜生、あの野郎はそこに立っていたんだろう、こんなふうか、こんなふうか？

マリー：そりゃ昼間は長いし、世の中は大昔からあるんだから、同じ場所にいろんな人が立ったでしょうよ。次から次へ順番にね。

ヴォイツェク：俺はこの目で見たんだぞ。

マリー：いろんな人が見えるでしょうよ。目が二つあって、ちゃんと見えて、お天道様が照っていればね。

ヴォイツェク：この目でだぞ！

マリー：(居直って) だからどうだって言うのよ。

ヴォイツェク：こいつめ。(なぐろうとする)

マリー：あたしに触れるなら触れてごらん、フランツ、そんな手で殴られるくらいならいっそナイフをぶちこまれたほうがましよ。あたしが十歳になった頃には、父さんだっ てあたしが睨みつけてやったら手が出せなかったんだよ。

ヴォイツェク：このあまめ！ — お前のどっかにしるしが現れているはずだがなあ！

人間は誰でも深い淵だ、覗き込むと眩暈がする。俺にはわからん！ こいつ、罪もない女のような顔をして歩いていやがる。罪のない女か、お前にはしるしがついているはずだ。俺にはそれが見えないのか。わからないのか。誰にわかるっていうんだ。³⁰⁾

ヴォイツェクはマリーの前にも無力である。マリーは、いざとなれば嘘やはったりを用いて、過ちを犯していながらも居直ってみせることができる。しかし、ヴォイツェクには人間の罪悪というものが、どこかしら理解の埒外にあるのだ。マリーという美しい女が罪を犯す、ということは彼の世界理解の範疇を超えているのだ。

ヴォイツェクはユダヤ人の店でナイフを購入し、マリー殺害の決心をする。いや、より正確に言えば、ヴォイツェク自身、自分が何をしようとしているのかははっきり理解していない。愛するものを刺し殺すということがどういうことか、彼自身理解してないのだ。

しかし、この世の中で唯一の所有物であるマリーを鼓手長に奪い取られるくらいなら、その存在をなき物にするしかないという混乱した意識だけが彼の中で増幅していったのであ

30) a.a.O., S.163f.

ろう。マリーを刺殺することを決意したヴォイツェクは次のような言葉でマリーを連れ出す。

ヴォイツェク：マリー、行こう。もう時間だ。

マリー：どこへ？

ヴォイツェク：俺にわかるもんか。³¹⁾

ヴォイツェクにとっては、人間と人間とのあいだのコミュニケーションが喪失されているのだ。大尉や医者 of 〈いじめ〉にさらされ、誰一人コミュニケーションの相手になってくれる者のいないヴォイツェクは、マリーを殺害するしかなかったのだ。

繰り返し述べるが、この劇は一人の精神を病む者が起した愛人殺しという事件を、その法的責任能力を問うという社会批判の立場を大きく超え出ている。ヴォイツェクという一人の实在の犯罪者をモデルにしながらも、この劇は、人間がこの世界で置かれた救済のない孤独な状況、根源的な孤独を劇表現したものだったのだと筆者は考える。

VII. 結語

『ヴォイツェク』が、一殺人者の責任能力の問題から出発した戯曲であることはたしかであるにしても、ビューヒナーの文学表現の広がり、犯罪者の責任能力をめぐる議論をはるかに超え出ている。劇中、ヴォイツェクが襲われる様々な幻覚・幻聴は彼にとっては〈現実〉であり、彼が見る黙示録的幻視も、この世界の不条理性にたいするヴォイツェクの絶望的な抗いの行為なのだ。そして、老婆が語る〈メールヘン〉は、この世界で他者の侮蔑に曝され、孤立した人間たちにとっての日常的〈現実〉なのである。この世界は悪意に満たされており、この悪意に抵抗しうるだけの社会的・精神的強靱さを持つ者、あるいはこの世界の悪意に加担している者たちにとってはこの世界は正常であり、なんらかの調和を備えている。しかし、この世界の悪意のありようを理解できず、ひたすらこの悪意にさらされている者たちにとって、この世界はヴォイツェクに感じられていたのと同様に、不安と悪意に満ちたものであり、老婆の〈メールヘン〉に描かれる子供が経験する世界と同様、寂寞とし、荒涼として、何のコミュニケーションも成立しないのだ。

ビューヒナーがこの作品で描いたのは悪意の世界としてのこの世界であった。それはこの作品の出発点であった犯罪者の責任能力の問題をはるかに超え出るものである。

作品『レンツ』の主人公レンツは牧師オーバリーンとその家族にとって憐れみの対象であり、彼自身、他者にたいする哀れみの主体であった。しかるにヴォイツェクは、作中の誰にとっても憐れみの対象ではなく、ヴォイツェクが存在している世界は、空虚でありつつ、悪意にみだされた空漠とした空間であり、そこでは『レンツ』の芸術論で指摘された、芸術表現における隣人愛、憐れみの情さえも無力化している。ビューヒナーが持つ人間

31) a.a.O., S.172

へのペシミスティックな認識はそこまで深まっていたと言わねばならないだろう。

〈参考文献〉

Georg Büchner „Woyzeck“. Marburger Ausgabe. Band 7,2. Text, Editionsbericht, Quellen, Erläuterungsteile. Herausgegeben von Burghard Dedner unter Mitarbeit von Arnd Beise, Ingrid Rehme, Eva - Maria Vering und Manfred Wenzel.

Georg Büchner » Lenz ‹‹. Marburger Ausgabe. Band 5. Herausgegeben von Burghard Dedner und Fubert Gersch unter Mitarbeit von Eva - Maria Vering und Werner Weiland.

Jan - Christoph Hauschild : Gerog Büchner. 1993 Stuttgart, Weimar.

Carolin Seling - Diez : Büchners *Lenz* als Rekonstruktion eines Falls » religiöser Melancholie ‹‹
In : Georg Büchner Jahrbuch 9.

Georg Büchner : Woyzeck. Studienausgabe. 2006 Stuttgart.

Georg Büchner : Lenz. Studienausgabe. 2000 Stuttgart. Erläuterungen und Dokumente.

Georg Büchner : Woyzeck. Stuttgart 2000. Interpretationen.

Gerg Büchner : Dantons Tod, Leonce und Lena, Woyzeck. Stuttgart 1990.

Hans Mayer : Georg Büchner. Woyzeck. Frankfurt am Main 1962.

Ernst Johann : Georg Büchner. Hamburg 1958.

Curt Hohof : J.M.R.Lenz. Hamburg 1984.

Georg Büchner : Werke und Briefe. Band 1, Band 2. Herausgegeben von Fritz Bergman : Insel Verlag 1982.

Jakob Michael Reinhold Lenz : Werke und Briefe in drei Bänden. Hrsg. von Sigrid Damm. Frankfurt und Leibzig 1992

ゲオルク・ビューヒナー全集 監修 手塚富雄 千田是也 岩淵達治 2006年 河出書房
新社2006年

ヴォイツェク ダントンの死 レンツ 岩淵達治訳 岩波文庫 2008年

山元孝郎 ゲオルク・ビューヒナーの『レンツ』 一罪の意識と救済の希求ードイツ文学
論攷 49号 2007年 阪神ドイツ文学会

〈注〉

ビューヒナーの著作、書簡を日本語訳するさいには、主としてGeorg Büchner : *Werke und Briefe*. Herausgegeben von Fritz Bergman. Insel Verlag 1982. をテキストとして用いた。河出書房新社版、岩波文庫版も随時参照させていただいた。